少子化の打開策としての生殖医療の現状 プレコンセプションケアの役割と課題

2022年４月から不妊治療が保険適用される様になった事に続き、23年10月には東京都で卵子凍結に係る費用への助成が開始された。社会的関心の高まりと共に民間企業に於ける支援も進みつつあり、卵子凍結は全国的な広がりの兆しを見せている。減少の一途を辿る出生数に歯止めを掛けたいところだ。しかし、長期的・根本的な解決には、若い世代を対象としたプレコンセプションケアの充実が重要だと山王病院名誉病院長の堤治氏は指摘する。「日本の生殖医療の現状と卵子凍結～プレコンセプションケアが日本の少子化を救う～」と題し、堤氏による双方向型のユーモア溢れる講演が行われた。

堤 治氏
医療法人財団順和会山王病院 名誉病院長、リプロダクション・婦人科内視鏡治療センター常勤

挨拶

原田 義昭氏「日本の医療の未来を考える会」最高顧問（元環境大臣、弁護士）

旧厚生省の政務次官をしていた2000年に小泉純一郎氏と共に介護保険制度を作り、今日まで続いて来ました。当時から高齢少子化は大きな問題と捉えられていました。もう１つテーマに上がっていたのが子宮頸がんです。年間罹患者が約１万人、死亡者は約3000人と言われています。これについても、もう一度皆さんと対策を考えて行きたいと思います。

三ッ林 裕巳氏「日本の医療の未来を考える会」国会議員団代表（衆議院議員、元内閣府副大臣）

自由民主党の女性活躍推進特別委員会で、幹事長として伊藤忠商事の人事の方にヒアリングをさせて頂いた[illegible]赴任[illegible]治療と卵子凍結に補助金を出す他、国立がん研究センターと連携し、がんとの両[illegible]行う等の施策を行う事で出生率が1.97に上昇したそうです。女性が安心して仕事を続けられる体制が重要です。

続きを読むには購読が必要です
詳しくはホームページをご覧下さい